



この展覧会は私が企画した。昨年6月に福岡アジア美術館交流ギャラリーで行われた同題の展覧会を東京で実現しようと、私はステップスギャラリーを二人に薦めた。広大な面積を持つ交流ギャラリーに比べ、ステップスギャラリーは実質狭い。だから何だという。現代美術に空間は問題とならない。福岡のベテラン二人は、世界に羽ばたいた。

私は、気鋭の美術批評平井亮一、原、廣末と私4名によるトークセッションを初日に企画した。平井は二人の作品を初めて見てトークに望んだ。満員御礼で、原と廣末は自らの思いを吐露し、平井は「絵画とは何か」を囁きながらも原と廣末がこれからどのようにすれば個々の想いが絵画に反映されるのかを示唆した。



絵画とは何か。1970年代には盛んに議論されたが、今では誰もが忘れてしまっている。現代美術に新しいも古いもない。この重要な議論を忘却してはならない。もしかして70年代には、始まっていなかったのかも知れない。これからしていかなければならないのだ。そう思うと、私の美術に対する見解もまだまだ甘ったるい。反省した。

二人の作品は、引きがない分だけ迫力が増した。廣末の作品が壁を通り抜け漆黒の闇の中へ広がっていくかと思うと、原の作品は輝きを増して全面にせり上がって来る。二人展の意義が交流ギャラリーよりも更に強調された気がした。小品も大作の意図を反映していい。原と廣末は長い経歴を持っているが、二人の活動はこれから始まるのだ。

